

「アイルランド義勇軍」結成に関する一考察

— 1911 - 1913年 —

南 野 泰 義

はじめに

[1] アルスター危機——二つのナショナリズムの衝突

[2] 「アイルランド義勇軍」の結成

[3] 「アイルランド義勇軍」の目的と組織

[4] 「アイルランド義勇軍」の危機

まとめ

はじめに

19世紀末期から20世紀初頭、アイルランドにおけるナショナリズム運動は、英国による「科学主義的国家」化政策の浸透とそれにとまなう同化傾向の進展を背景に、カトリック系中間層の形式的な社会的上昇が可能となったこととプロテスタント系住民の優越的地位が解体されるという状況の中で、「アイルランド的なもの」と英国モデルを対置させる形で立ち現れてくる。19世紀末期におけるナショナリズム運動の特徴について述べると、政治的ナショナリスト運動が分裂し、ゲーリック・リーグを中心とする文化的ナショナリズム運動がその受け皿として位置付いたことにより、多様なスタンスを持つ政治的ナショナリストおよび運動体を結びつける接着剤としての役割をゲーリック・リーグが担うことになる。そのことにより、アイルランドのナショナリズム運動を主導する主体としてカトリック系知識人がイニシアティブを取る状況が生まれ、アイルランド問題の解決の方向性が連合王国の枠内での自治獲得要求から分離主義的要求に向けられるようになる¹⁾。

20世紀初頭、アイルランド北部のアルスター地方（現在の北アイルランド六郡を含む）におけるユニオニスト勢力の武装化に対抗する形で、ナショナリスト勢力はゲーリック・リーグの運動の延長線上に、「アイルランド義勇軍」結成＝武装化に向けた動きを強めることになる。

こうした文化的ナショナリズム運動から政治的ナショナリズム運動への展開の過程において、この2つの運動を接合する位置に存在する活動家に、ゲーリック・リーグの創始者であるオウン・マクニールとアイルランド共和主義者同盟（IRB）の有力な指導者の一人であるバルマー・ホブソンがいる。筆者は、すでに拙稿「19世紀アイルランドにおけるナショナリズムと知識人（2・完）」において、ゲーリック・リーグ結成に関わって、政治的ナショナリズム運動から文化的ナショナリズム運動への移行期におけるオウン・マクニールの役割を考察した。本稿では、かかる研究を踏まえ、この二人の活動家の行動に着目し、アイルランド義勇軍の結成過程を検証することにより、政治的ナショナリズムと文化的ナショナリズムとの関係性の解明を試みるものである。

[1] アルスター危機——二つのナショナリズムの衝突

1910年当時、アイルランドにおけるナショナリストの政治地図は、3つの潮流から構成されていた。第1の潮流は、圧倒的多数派を構成していた議会主義派ナショナリスト（主流派）である。この潮流は、アイルランド問題の当面の解決にはホームルール法案を英国議会で可決成立させることであるという立場にあった。この立場は、当面の間は大英帝国の枠内にとどまり、「ドミニオン」として強力な自治を得ることであった。この勢力はジョン・レドモンド、ジョン・ディロン、ジョセフ・デブリンの指導の下にあるアイルランド議会党に結集していた。

第2の潮流は、議会主義的な政治方針と対峙していた分離主義的なナショナリストである。かれらは英国からの分離とともに、アイルランドに自主的な軍隊を打ち立てることを求めている。この勢力はアイルランドの伝統を代表するものとして自らを位置づけ、とくに農村部において支持を広げていた。この勢力の中で、組織された政治団体はアイルランド共和主義者同盟（IRB）であったが、1883年のイングランドでの爆弾攻撃運動に失敗して以後、ほぼ20年の間、地下に潜伏する状態が続いていた。1905年、バルマー・ホブソンによる組織の立て直しが図られることになり、1907年にトーマス・クラーク²⁾がアメリカから帰国すると、活動を本格化させるようになる。しかし、そのメンバーは2,000人程度であり、この組織そのものが政治的な影響力を持つまでには至っていなかった。この組織は、秘密結社としての性格を持ち、さまざまな大衆運動に入り込み支持拡大を図る少数精鋭の細胞集団と言えるものであった。

第3の潮流は、議会主義的なナショナリストと分離主義的なナショナリストの間にあって、武力ではなく、合法的な方法で、アイルランドの独立を達成しようとする制度的ナショナリストである。この勢力は、統一されかつ組織された政治団体を持つものではなく、アーサー・グリフィスのシン・フェイン党をはじめとして、ゲーリック・リーグに集う文化的ナショナリストまで多様な意見を持った人々を包摂していた。たとえば、グリフィスのように議会主義的な

政治方針には反対の姿勢をとる者から、マクニールのようにアイルランドの独立を強く主張しつつも、レドモンドの政治方針に賛同する者まで含んでいたのである³⁾。

こうしたナショナリスト諸勢力の状況に対して、ユニオニスト勢力の動向を見てみると、1910年に、W.H.ロングに代わってアルスター・ユニオニスト会議（UUC）の指導者となっていたエドワード・カーソン卿は、「もしアイルランドの自治が英国法令全書のなかに持ちこまれるのであれば、ユニオニストはそれを無視し、王室に忠誠を誓う地方的な政府を設置するであろう⁴⁾」と主張し、全アイルランドに対する自治を阻止するために、アルスターの抵抗を強化する対応を求めているのである。さらに、1911年11月に、バルフォアに代わって、アルスター長老派に属するアンドリュー・ボナーローが保守党／ユニオニスト連合の指導者に就任すると、同年11月23日、アルスターのオレンジ団メンバーが、ジェームス・クレイグの地盤であるベルファスト郊外クレイガボンにおいて、5万人規模の大集会を開催した。もちろんこの集会の基調講演はエドワード・カーソン卿であった⁵⁾。1913年1月、アルスターにおいて、プロテスタントからなる武装集団——アルスター義勇軍（UVF）——が結成され、UUCは1911年9月に、臨時政府樹立の用意があることを表明する⁶⁾。UVFは同年11月までに、7万6,757人を組織するまでに成長していた。UVFは治安判事の認可を獲得することにより、合法的な組織として活動することができたのである⁷⁾。このように、ホームルール法案をめぐるユニオニストの抵抗は保守党の下支えのもと、ついに武装集団結成へと展開する。かくて、アルスター危機の火蓋は切って落とされたのである。

UUCは、1912年9月28日、同機関紙アルスター・デイに、『アルスターにおける神聖同盟と誓約』を発表し、かかる誓約への署名を呼びかける行動に出る。この署名は21万8,206筆に上った。この『アルスターにおける神聖同盟と誓約』には、「ホームルールがアルスターおよびアイルランド全体の物質的利益を損ない、われわれの市民的、宗教的自由を破壊し、われわれの市民的権利を打ち砕き、帝国の統一を脅かすということを、われわれの良心にかけて悟った。神の恩寵により国王たるジョージ5世。その忠臣たるわれわれ、ここに署名したアルスターの民であるわれわれは、連合王国において等しく与えられた市民権を守り、そしてアイルランドにおける自治議会を設置するという当面する陰謀を打ち破るために必要とされるあらゆる手段を行使し、われわれ与えられたこの受難の時を通じて、自らとわれわれの子供たちのために、お互い手に手を取り合って立ち上がらんことを、神聖な誓約において誓うものである。このような議会がわれわれに押し付けられるのであれば、われわれはこの権力を認めないことを、神とわれら自らの前で厳粛かつ相互に誓約する⁸⁾」とあり、これは自由党が準備しているアイルランド自治法案を力によって粉碎することを宣言するものであった。ここに至って、ホームルール法案、つまりアイルランドの政治的地位をめぐる抗争は新しいステージを迎えることになる。

ここで重要なのは、ユニオニストの運動拠点はベルファストを中心とするアルスター地方にあった点である。これは、ユニオニストの運動が17世紀以降のイングランドによる植民政策の帰結である「入植社会」の形成と密接にかかわっているがゆえに、ユニオニストとナショナリストとの間の対抗軸はアルスター地方の政治的地位をめぐる問題に収斂していくことになる。ここに、20世紀における英国＝アイルランド関係をめぐる基本矛盾が組織的な対立関係となって明確なものになったと言える。

アルスターのユニオニストが反ホームルール運動を活発化させていることについて、レドモンドをはじめとするアイルランドのナショナリストは、アルスター・ユニオニストによる英国国家を分断しようとする行為であり、不当な要求と見なしていた。他方で、イングリッシュ・ユニオニストなどの英国の保守勢力は、当時の自由党政権を権力の座から引き摺り下ろす格好の機会と考えていたのである⁹⁾。

当時の政治情勢は、レドモンドを中心とする議会主義的なナショナリストにとって、厳しい局面に立たせることになる。つまり、主流派ナショナリストはカーソンを中心としたアルスター・ユニオニストの動向に対処する手段を持ち合わせておらず、IRBもナショナリストを束ねてアルスター・ユニオニストに対峙するだけの求心力を持ちえていなかったからである。1911年には、ベルファストの一部のナショナリストの下部組織からユニオニストに対抗して武装組織の結成を呼びかける動きが現れてくる。しかし、アルスターにおいて、政治的立場にとどまらず、宗派的憎悪が絡む内乱状態に至るのを望まなかったジョセフ・デブリンはベルファストのナショナリストに事態を静観することを求めたのである¹⁰⁾。

他方で、パトリック・ピアースは1912年4月2日にダブリンで、私的な集会を開催し、武装組織の結成を呼びかける提案をしている。この集会にはIRBのメンバーも出席していたが、IRB指導部はピアースの提案を時期早々であるとして、組織として支持する立場を取ろうとはしなかった。しかし、1912年4月から5月にかけて、アイリッシュ・フリーダム紙にザ・オレイリの署名による“Ninety-Eight”と題した一連の論文が掲載された。その中で、4月に発刊された論文に、オレイリは「つまるところ、すべての政府が依拠する基礎は武力の保持であり、これを使用する能力である」¹¹⁾と述べ、武装組織の結成を呼びかける態度を示したのである。オレイリはIRBのメンバーではなかったが、シン・フェイン党の幹部であった。このオレイリの論文がIRBの機関紙に掲載されたのである。この時点で、武装組織結成にかかわるIRB指導部の方針転換が進んでいたと見ることができる。こうした武装勢力結成に向けた動きの背景に、当時、英国政府はヨーロッパ大陸での情勢如何によってはアイルランドに駐留させている部隊を四分の三程度削減し、ヨーロッパ対応に振り向けるプランを持っていた。このことはアルスターのユニオニストにとって脅威であったが、分離主義的なナショナリストにとっては好機として受け止められたのである¹²⁾。

1913年1月、アルスター・ユニオニスト会議がアルスター義勇軍結成を決定したのを受けて、1913年1月20日のシン・フェイン党全国委員会は、ザ・オレイリとイーモン・シェントの提案に基づいて、武装勢力の結成に踏み切る結論を出した¹³⁾。のちにマクニールは、ナショナリストによる武装集団——アイルランド義勇軍——結成は、「実のところカーソンの功績である」¹⁴⁾と回顧している。すなわち、アルスター義勇軍の結成、そしてアイルランド義勇軍の創設は、ナショナリストとユニオニストとの関係を物理的暴力装置をもって明確に象徴する出来事であった。

シン・フェイン党の動きに相応して、IRBは武装組織結成に向けた動きをはじめることになる。当時、IRBの議長であったバルマー・ホブソンは、1913年7月、IRBのダブリン中央委員会を招集し、義勇軍組織の結成を公然と主張すべき時期が来たと述べ、IRBのメンバーが武装組織結成の運動に積極的に参加し指導的役割を果たすよう指令を下している¹⁵⁾。そして、武装組織結成に向けた準備作業が秘密裏に、ホブソンの盟友であるパトリック・オライアンの父親が管理人を務めるパーネル街41番地のアイリッシュ・ナショナル・フォレストーズで始まった。この作業部会を指導した主なメンバーは、マイケル・ロネルガン、パトリック・オライアン、コン・コルバート、イーモン・マーチンであり、かれらは1902年にホブソンがベルファストで組織した第一次フィアナ・エーラン（エールの戦士）の幹部メンバーであった¹⁶⁾。

第一次フィアナ・エーランは、ホブソンが19歳のときに、1902年に6月26日、ベルファストを拠点に結成した青年同盟組織である。1904年にホブソンがIRBに入党し、その後ダブリンに移ると、この組織は自然消滅してしまう。しかし、ダブリンで、ホブソンはスライゴのマルキエヴィッチ伯爵夫人と結合する。マルキエヴィッチ伯爵夫人はシン・フェイン党员であり、女性共和主義運動「ヘレナ・モローニー」の組織者であると同時に戦闘的な分離主義者であった。ホブソンとマルキエヴィッチ伯爵夫人は、ベルファストでのフィアナ・エーランの経験をダブリンでも実践することを考え、1909年8月16日、共和主義的な青年組織の結成に向けた集会を持たれ、第二次フィアナ・エーラン（ダブリン）の結成が確認された。この集会には、2人のほかに、コン・コルバート、パトリック・オライアン、ショーン・マクガリーが参加していた。いずれもIRBのメンバーである。そして、1910年に第1回総会が開かれ、ここで、マルキエヴィッチ伯爵夫人が総裁に選出され、ホブソンは副総裁となった。ホブソンにとって、マルキエヴィッチ伯爵夫人はその人脈と資金力からして、理想的な指導者であった。形式上、マルキエヴィッチ伯爵夫人は総裁の肩書きを持ってはいたが、その実権はホブソンが握っていた。そして、1912年ごろから、元英国軍人のショーン・カヴァナーを招聘し、コン・コルバートとイーモン・マーチンが中心となって、英国の軍事教書をもとにした軍事教練を開始するようになる¹⁷⁾。

1913年8月から9月にかけて、全国規模の軍事組織の結成を促す事態が発生する。その一つ

が8月26日にダブリンで起こった大ロックアウト事件である。第2がアスローンにおいてミッドランド義勇軍の結成であった。第1に、大ロックアウト事件は鉄道労働者のストライキから端を発し、新聞社、炭鉱、港湾の労働者、そして農業労働者へと拡大していった大規模な争議行動を発端とするものである。こうした労働者の動きに対して、雇用者連合はまずアイルランド交通・一般労働者同盟（ITGWU）に加盟している労働者をはじめとして約25,000名を職場から締め出す行動に出たのである。こうした状況の中で、労組による抗議集会がダブリンで断続的開催され、8月26日のベレスフォード・パレスでの大集会をはじめとして、警官隊との緊張は高まっていった。そして8月31日、シャックビル街で開催された大集会に対して、RIC武装警官隊が武力によって集会を中止させようとし、2人の労働者が死亡するという事態に発展した。いわゆる「血の週末事件」である¹⁸⁾。

これらの集会を組織していたのは、ジェームス・ラーキンであった。ラーキンは、ベレスフォード・パレスでの大集会において、抗議行動に対する繰り返される警官隊による暴力や威嚇を非難するとともに、「もしアルスターの人間が武器を持つことが正義に適っており合法的であると言うのであれば、なぜダブリンの人間が自らを守るために武器を手にするを正義に適っており合法的であると言えないのだろうか。皆さんはそれを望んでいる。……皆さんは私がこのように言い、何を行おうとしているかを知っている。そう、武力である。私は武装する。……もしエドワード・カーソンがアルスターの人間がアルスターに暫定的な政府を作ることが正義であると言うのであれば、私が皆さんにダブリンに暫定的な政府を作ろうと呼びかけても良いはずである。だが、皆さんが暫定的な政府の樹立を求めようが求めまいが、皆さんは武装することが必要なのです」¹⁹⁾と武装闘争の必要性を訴える演説を行ったのである。

このラーキンの訴えは、8月31日の事件を契機に、いっそう緊急性を増すことになる。そして、1913年11月23日、アイルランド市民軍が結成され、その初代司令長官にアルスター出身のプロテスタントであり、ボーア戦争に従軍した元英国軍人のジャック・ホワイトが就任した。この部隊は、ダブリンのクロイドン・パークにある交通労働者組合を拠点に、第二次フィアナ・エーランで訓練を受けたメンバーによって軍事教練が施されていた²⁰⁾。

市民軍の組織はダブリンに限定されたものであり、ダブリンの労働階級を守ることを第一義的な目的とし、入隊者も労働組合員にとどまっていた。だが、大ロックアウト事件からアイルランド市民軍の結成への一連の展開は、第二次フィアナ・エーランの下支えのもとで、アイルランド義勇軍結成の物理的な前提条件を準備する作用を持っていたと言える。

第2に、ミッドランド義勇軍結成という情報がダブリンに伝わったことである。ミッドランド義勇軍はアスローンを拠点に組織された軍団である。この組織については不明な点が多く、少なくとも言えることは、この組織はアスローンの労働組合組織を拠点に、反カーソンのスローガンを掲げ政治的な目的を前面に押し出していたということである。

この組織は、ウエストミース・インディペンデント紙の編集者であるマイケル・マグダーモット＝ヘイズが指導し、パシィ・ダウニーが司令官を務めていたとされている。10月に発表された『国王に忠誠を誓う義勇軍宣言』では、アルスターのカーソンの動きを分離主義的策動と捉え、一つのアイルランドを守り、英国王への忠誠とレドモンドおよびアイルランド議会党を強く支持する立場を明確にしていたのである。つまり、大英帝国の枠内にとどまり、自治を実現するという立場に立った組織であったとすることができる。それゆえ、カーソンとは異なった文脈で、アイルランドの英国からの分離を主張する共和主義者とも一線を画すものであったと考えられる²¹⁾。

マグダーモット＝ヘイズがウエストミース・インディペンデント紙において報じたミッドランド義勇軍結成の記事は、ダブリンのナショナリストの間で、大きな期待を持って受け止められた。マクニールはこの行動を大いに歓迎する書簡をオレイリに送り、政治的ポジションとしてはアイルランド議会党とシン・フェイン党の中間に位置するデイヴィッド・パトリック・モランもリーダー紙の中で、アスローンの歴史的な行動はナショナリストの模範であるとの評価を与えている²²⁾。

しかし、現実には、ミッドランド義勇軍はウエストミース・インディペンデント紙が報じたような5,000名規模の組織ではなく、50名足らずの組織であったと考えられている。そして、第一次世界大戦が始まると、メンバーのほとんどが英国軍に転身し、軍団は消滅してしまったのである²³⁾。ここで重要なのは、ミッドランド義勇軍が現実に存在しどの程度の影響力を持ったかではなく、政治的なスローガンを持った軍団が結成されたという誇張された「情報」そのものなのである。つまり、大ロックアウト事件とそれに続く武装組織結成を求める気運の高まりとアイルランド市民軍の結成、そしてアスローンにおけるミッドランド義勇軍結成という「情報」は、武装組織結成を容認する大衆的な気分感情を刺激し、IRBが義勇軍結成に踏み出す好条件を生み出す作用を持ったのである。

[2] 「アイルランド義勇軍」の結成

以上のように情勢が動く中で、1913年11月1日付けのゲーリック・リーグ機関誌クレイヴ・ソリッシュに、マクニールは“The North Began”²⁴⁾と題した論文を発表し、南部アイルランドにおける力による対抗を呼びかけることになる。かくて、アルスター義勇軍の形成や大衆運動の組織化を進めるユニオニストの行動は、ナショナリスト活動家をして、義勇軍の編成を決意させることになる。

義勇軍結成に向けた準備会合が、11月11日と14日に、ダブリンのローアー・アビー街にあるウェインホテルで開催された。義勇軍結成に向けた準備会の開催にあたって、ホブソンとオレ

イリは、義勇軍の幹部会代表就任をマクニールに要請し、あらかじめ承諾を得た上で、「呼び掛け人」メンバーとなる12人のナショナリストをリストアップしている。このメンバーは、バルマー・ホブソン、オウン・マクニール、パトリック・ピアース、ショーン・マクダーモット、イーモン・セアント、ザ・オレイリ、ジョセフ・キャンベル、ジェイムス・A・ディーキン、ショーン・フィッツボーン、ピアラス・ベアスレイ、デイヴィット・パトリック・モーラン、ウイリアム・P・ライアンであった²⁵⁾。

11月25日火曜日の午後8時、ダブリンはパーネル街にあるザ・ロタンダの大コンサートホールにおいて、第1回公式会合が開かれ、ここに正式にアイルランド義勇軍Irish Volunteersは結成されることになる。アイルランド義勇軍は、ゲーリック・リーグの活動方針の中に位置づけられているように、アイリッシュとしてのナショナリティを守る目的としたものであった²⁶⁾。

アイルランド義勇軍は司令長官オウン・マクニール（ゲーリック・リーグ，GL）、ローレンス・J・ケトル（Ancient Order of Hibernian, AOH）、財務長官ザ・オレイリ（マイケル・ジョセフ・オレイリ，シン・フェイン党，SF）とジョン・ゴア（AOH）を中心に、30名で構成される「暫定委員会」が指導部としての役割を果たしていた。

この「暫定委員会」のメンバー構成を所属組織別に見てみると、次のようになる²⁷⁾。

アイルランド共和主義者同盟（IRB）所属のメンバー：

ピアース・バースリー，ペーター・マッケン（GL，SF），イーモン・シェント（GL，SF），リアム・メロウズ，バルマー・ホブソン（フィアナ・エーランFE），シーマス・オコンナー，マイケル・ロネルガン，ロバート・ペイジ，ショーン・マクディアマダ（アイリッシュ・フリーダム），コン・コルバート（FE），エーモン・マーチン（FE），パトリック・オライアン（FE）

シン・フェイン党：

ザ・オレイリ，ジョン・フィッツギボン（GL），リアム・ゴーガン

アイルランド議会党所属のメンバー：

ジョン・ゴア（AOH），トーマス・ケトル，ローレンス・J・ケトル，モーリス・ムーア大佐（GL）

AOH所属のメンバー：

マイケル・J・ジャッジ，ピーター・オライリ，ジェイムズ・レネハン，ジョン・ウォルシュ

その他の組織所属とされているメンバー：

ロジャー・ケイスメント卿（GL）、コルム・オラクラン、パトリック・ピアース（GL）、トーマス・マクドナー、ジョセフ・M・ブランケット（アイリッシュ・レヴュー）、オウン・マウニール（GL）、ピーター・ホワイト（ケルト文芸協会）

かかるメンバー構成を見ると、IRBのメンバーが12名（シン・フェイン党メンバー5名のうち2名はIRBのメンバー）であり、残りの非IRB系のメンバーはアイルランド議会党系メンバー4名を含む18名であった。しかし、IRBおよびシン・フェイン党からなる急進的なナショナリストは30名中15名となり、さらにトーマス・マクドナー、ジョセフ・M・ブランケット、パトリック・ピアースらIRBシンパを含めると、この委員会構成は、18名が急進派ナショナリストによって占められていたのである。

ここで重要なのは、これまで議会主義的なナショナリストや武装闘争を視野に入れた急進的なナショナリストとも距離を置いてきたマクニールが、義勇軍結成の提唱者として現れてきた背景として、IRBとシン・フェイン党の水面下での活動が存在した点である。特に注目すべきはバルマー・ホブソンである。

ベルファスト出身のバルマー・ホブソンはクエーカー教徒の家庭に生まれ、父親はグラッドストーンと自由党のホームルール政策の支持者であった。だが、かれはアイルランド・ナショナリストに親近感を持ち、ゲーリック・リーグとゲール体育協会に加盟するようになる。そして、1904年、ホブソンはデニス・マッカローの推薦で、IRBに入党している。ホブソンとマッカローはその後、ベルファストでIRBの組織再建に乗り出す。1908年、ホブソンはショーン・マクダーモットなど青年メンバーとともにダブリンに移り、1909年の第二次フィアナ・エーランを設立後、1910年にはアイリッシュ・フリーダム紙を刊行し、1911年に、IRBの最高幹部会のメンバーに選出されている。1913年の半ばまで、IRBのダブリン中央委員会議長を務めていたのである。そして、バルマー・ホブソンは、大衆運動として義勇軍運動を組織するにあたり、特定の政治集団に与せず、超党派的性格を持つ指導者の擁立を模索するようになる。結論的には、ホブソンは、ザ・オレイリを仲介者として、非党派的かつ分裂状態にあるナショナリスト諸勢力が結集できる場を提供したゲーリック・リーグの創始者であるオウン・マクニールの擁立を画策し、その仕組みを作る行動に出るのである²⁸⁾。

マクニールは、アイルランド議会党に対して、「戦争が引き起こしたこの危機において、英国議会に議席を持つメンバーは選挙されているという権威を以って、アイルランドの諸問題を取り扱うための明確な力があることを自ら宣言すべきである。政府の形態を変えることなしに、かれらは行政を動かす権限を要求すべきである。そして、その目的を果たすための委員会を立

ち上げるべきである」²⁹⁾と主張していたが、ジョセフ・デブリンはその責任はあまりのも大きすぎるとマクニールの提案を拒否する回答している。マクニールは、この回答を、アイルランド議会党は「まったく期待できない」組織である証と理解したのである³⁰⁾。

それにもかかわらず、ホブソンはマクニールを指導者に招くにあたって、「マクニールはレドモンドの公然たる支持者である」³¹⁾と言い切っている。そこには背景と理由があった。

第1のポイントは、ホームルール法案をめぐる政治情勢の変化である。カーソン率いるアルスター・ユニオニストがアルスター義勇軍を結成し、反ホームルールをスローガンとする大衆運動の組織化を進める中で、ナショナリストの団結とアルスター・ユニオニストに対してカウンターパートとなる統一的な組織の形成に迫られていたということである。

第2のポイントは、当時のナショナリスト運動の現状にかかわる問題である。当時、アルスター・ユニオニストの動向に対峙する勢力として、ジョン・レドモンドを中心とする多数派の議会主義的ナショナリストへの求心力が低下する中で、ホブソンなどの分離主義的ナショナリスト、ラーキンなどの社会主義的ナショナリスト、ゲーリック・リーグをも包摂する穏健な制度的ナショナリストなどの少数派がそれぞれセクト主義的に分立し、統一性のある運動を展開する状況にはなかった。それゆえ、すべてのナショナリストの団結を引き出し、全国的で統一的な運動に結実させることなしに、アルスター・ユニオニストの運動の対峙できない情勢にあった。こうしたナショナリストの運動の立ち遅れを如何に克服し情勢に対応した運動を構築するのかが、当時の最大の課題であったとさえ言える。

そこで、ホブソンは「私は誰からも過激なナショナリストと見られている」³²⁾として、11日の第1回の準備会合への出席を差し控えている。このことは、義勇軍結成に求められるセクト主義を排除し、ナショナリスト勢力の大同団結を促す必要から、この準備会合が大衆運動として開催されているという形を取ろうとした行動と考えられる。また、かれは主流派のレドモンドの支持なくしてナショナリストの統一的な組織を結成することができないことも十分理解していた。それゆえ、この行動は、レドモンドを刺激しないための配慮であったとも言えよう。ホブソンはシン・フェインの重鎮でありマクニールと親交のあったザ・オレイリを巻き込みながら、義勇軍結成問題を通じて、ナショナリスト諸組織の団結と統一を背後から図ろうとしたのである。すなわち、議会主義的な運動を乗り越え、ナショナリスト諸勢力のセクト主義的活動形態とこれを克服し、情勢に対応した運動の構築がホブソンの主たる課題であった。

マクニール擁立に向けた論議の焦点がどこにあったのかは、ピアースの発言からも明らかである。ピアースは「私が1913年11月の声明を執筆したとき、私が接触を持ったナショナリストのグループはアイルランド義勇軍の結成をすでに決めていた。われわれとは異なり、「進歩的」と考えられていない、そして人々の同意を促すことのできる指導者を慎重に探していた。もちろんわれわれの支持者の間においてである。私が1913年12月の声明を書いているとき、オウ

ン・マクニールがクレイヴ・ソリッシュ紙に“The North Began”なる論文を掲載した。そして、われわれはマクニールをわれわれの指導者に迎えることで一致した³³⁾と回想し、ホブソンたちの間で、セクト主義を乗り越えることのできる指導者を模索していたことが看取される。

マクニールは、アイルランド義勇軍の司令長官に就任するにあたり、「私は、アイルランド問題をめぐって、アイルランドの将来を決定するような危機が訪れたと考えている。そして、特に重要なこととして、私はゲーリック・リーグの運動とその原理・原則をあれほど重要視してきたわけだが、アイルランド人が来るべき政治的闘争に共に立ち上がることは困難であると、私は考えている」と述べ、「ゲーリック・リーグの運動を通して、私はアイルランドのほぼあらゆるところで知られるようになった。そして、穏健な見解を持つ人間として見られているようである。物理的な力の行使を求める勢力の要求を常に限定された範囲に止めおいてきた。これまで疑いを持って横目で見えてきたような行動計画を、教育活動に携わる聖職者やそれ以外の人々をはじめとして、そうした勢力に属さない多くの人々としっかりした関係を持つ私のような人間だからこそ、より広範な人々に勧めることができるのかもしれない。たとえ、この行動計画が極端な急進派と呼ばれるような人々の求めに応ずるものであったとしても。これは、物理的な力の行使を擁護する人々が取ってきた立場ではあるが、全体としてみれば、私がいまこそ役に立つと考えることなのであり、確信を持っている³⁴⁾と発言している。

ゲーリック・リーグの指導者であり大学教師であったマクニールは、主にアイルランドの歴史や言語に関わった教育現場での活動に従事してきたがゆえに、政治的な党派性が必ずしも明確な形で見えてこない存在であった。このことは、政治的ナショナリストにとっては重要な意味を持つものであった。マクニールの政治的役割は、かれが明確な党派性を持たないがゆえに、政治的なナショナリストのセクト的な対立や不統一を乗り越え、共通の課題のもとで大同団結を図ることが可能であったという点に求められよう。

[3] 「アイルランド義勇軍」の目的と組織

11月17日に発刊されたフリーマンズ・ジャーナル紙に、アイルランド義勇軍の基本方針が掲載されている。これは14日の会合において確認されたものである。そこには、この新しい運動は、アルスター義勇軍に対峙するものであり、その名称をアイルランド義勇軍とするとし、3つの基本方針が記載されている。それは、(1) アイルランドのすべての人々の共通に諸権利と自由を守り保障することを目的としていること、(2) この目的を達成するために、アイルランド義勇軍は武装し、訓練され、軍紀を高めこと、(3) この組織は、草の根的でいかなる階層的、差別的性格を持たない民主主義的な組織原則を基本とすることであった。そして、暫

定委員会は義勇軍の活動を支援するものであり、決してこれを指揮する機関ではなく、義勇軍を構成する個々の部隊は自発的かつ自治的な性格を持つものであるという点を強調している。また、この組織は大衆的な組織であり、特定の政党や政治勢力の一部をなすものではなく、アイルランド議会党やAOH、その他の組織に指導され、これらに従属する組織であってはならないとしている³⁵⁾。つまり、義勇軍運動の非党派性と大衆的性格を強調するスタンスを取っていたのである。

だが、現実には、暫定委員会はIRBメンバーが多数派を形成しており、事実上IRBの指導下にあった。それゆえ、ここに示された組織原則は、IRB以外の政治勢力による指導、介入を許さないという明確な意思表示とも考えることができる。

ホブソンによると、暫定委員会に先立つ、準備会合は11月14日以降、三度持たれ、11月20日には、ダブリンのすべてのナショナリスト組織を対象に個人宛で、マクニールとローレンス・ケオルの署名で招請状が送付された。この招請状はマクニールの執筆によるものとされているが、義勇軍結成の趣旨や根拠は述べられておらず、アイルランド情勢を憂慮する有志が暫定的な「呼び掛け人」会を結成したこと、ダブリンに義勇軍を設立しこれを全国規模に拡大する取り組みを進めていることのみが記載されていた³⁶⁾。

そして、11月25日の公式会合において、アイルランド義勇軍の基本綱領（第一次）がラリー・ケトルによって読み上げられ、義勇軍運動の全体像が明らかにされることになる。この基本綱領は作成段階において、マクニールが下書きし、トム・ケトルが部分修正した原案を暫定的な「呼び掛け人」会のメンバー修正を受けて、11月25日に公開されたものである³⁷⁾。

この基本綱領（第一次）は、「(英国政府の方針転換は、) ネイションとしてのわれわれの権利を否定するだけではない。われわれに関するいかなる事柄も、武力を振りかざすことで地位と権力に与っている英国下院の多数派によって統制されているとしたら、それは明らかに『連合法体制』のもとで、われわれに与えられている僅かな市民的諸権利さえも取り上げようとするものである」³⁸⁾として、英国議会におけるホームルール法案の採決を前にして、英国政府および保守党のアイルランド問題に対する態度を転換させたことに対する批判が基調とされており、義勇軍結成の根拠を英国政府と保守党の方針転換に置くことを目的とした構成になっている。それゆえ、ミッドランド義勇軍の場合とは異なり、イングランド国王に対する忠誠有無に関わる文言は含まれていないばかりか、アルスターのオレンジ団やアルスター義勇軍についてもいっさい言及されていないのである³⁹⁾。

そして、かかる文書は、「アイルランド義勇軍の目的は、アイルランドのすべての人々の共通に諸権利と自由を守り保障することである。その役目は防衛的なものであり、身を守るためのものである。そして、いかなる抑圧も支配も意図するものではない。この軍隊は、思想・信条、政治的見解、社会階級の違いなく、すべての健康なアイルランド人民に開かれて

（図1）アイルランド義勇軍の入隊志願書

Company _____ No. _____
I, the undersigned, desire to be enrolled in the Irish Volunteers formed to secure and maintain the rights and liberties common to all the people of Ire- land without distinction of creed, class, or politics.
Name _____
Address _____
City Ward or Township _____
Date _____

（出典）Bulmer Hobson, *A Short History of the Irish Volunteers*, Dublin, 1918, p.28.

いるのである」⁴⁰とし、アイルランド義勇軍の防衛的かつ民主主義的な性格を強調することにより、ユニオニストの特権的な政治的地位とかれらのアルスターにおける義勇軍運動を間接的に批判する形を取っているのである。ここには、英国政府および保守党を「主敵」とすることにより、英国議會を必要以上に刺激することなく議會内部に楔を打ち込むとともに、同時にレドモンド派の動揺を最小限に留め、ナショナリスト勢力の分裂を回避するという配慮がなされていたのである。

ここで、アイルランド義勇軍の組織形態について知る上で、オウン・マクニールとローレンス・J・ケトルの署名および「1913年12月16日、ダブリン」の日付が記載された『義勇軍暫定規約』および『義勇軍結成のための訓令』が重要である。これらの文書は1913年12月、『義勇軍基本綱領（第一次）』および『資金調達のためのアピール』とともに、4ページからなる小冊子ボランティア・ガゼットにまとめられ全国的に配布されている。かかる文書には、アイルランド義勇軍の目的と方針、そして組織体制が刻銘に示されているのである。

まず『義勇軍暫定規約』について見ると、アイルランド義勇軍の目的として、第1に、アイルランドのすべての人々の共通に諸権利と自由を守り保障すること、第2に、上記の目的のために、アイルランド義勇軍は武装し、訓練され、軍紀を高めること、第3に、あらゆる階層、社会的身分、党派を持つアイルランド人民を結集することが述べられている。さらに、義勇軍組織について、以下のように五つの基本原則が示されている。（1）義勇軍を代表する機関が構築されるまで、アイルランド義勇軍の指導は暫定委員会が行なう。（2）義勇軍諸部隊を速やかに全国規模で編成し、地方司令部を構築する。（3）暫定委員会は各ディストリクトおよびカウンティの地方委員会を承認し、この地方委員会は中央委員会の指導のもと、地方での活動を推進する。（4）中央委員会は各ディストリクトおよびカウンティの地方委員会の権限を定め、基本方針と足並みのそろった活動を要請する権限を持つ。そしてこの目的を実行するに

必要な権限を持つ。(5) 義勇軍の基礎単位は中隊であり、これらは中央指導機関直属の組織であるとされている⁴¹⁾。

その上で、『義勇軍編成のための訓令』文書では、義勇軍兵士が守るべき規約が12項目にわたってまとめられている。その概要は以下の通りである。第1条：この義勇軍規約の学習に努め、これに違反してはならない。第2条：有能な教官の指導を確保し、すべての退役軍人を可能な限り役立たせる。第3条：義勇軍の参加をすべての組織に呼びかける。この規約と基本綱領を認めるアイルランド人民は義勇軍に入隊することを妨げられない。第4条：暫定委員会は、アイルランド人民からなるすべての部隊を可能な限り代表するものであり、義勇軍内部において、ある特定の部隊がその他の部隊に対して政治的優越を得ようとするいかなる策動や意図と闘う。第5条：すべてのアイルランド人民に共通する諸権利を保障し堅持するという義勇軍の目的が、大衆に理解されるよう努める。第6条：上記の目的に確信を持つ人々には、義勇軍への参加を勧める。第7条：中央指導機関において定められた組織的の指導にしたがう。第8条：義勇軍兵士は必要な経費を賄うための所定の金額を週単位で納める。第9条：義勇軍兵士は各々で制服と銃を購入しなければならない。なお、それ以外の支出が生じた場合は義勇軍財政からの支援金や中隊への還元金によって補填される。第10条：それぞれの部隊は、地方指導機関が設置されるまで中央指導機関直属とし、中央指導機関は各部隊に対して指導し、必要な助言を行なう。第11条：義勇軍兵士は軍の規約を守り、これに敵対する行動は行わない。第12条：中央指導機関と恒常的かつ定期的なコミュニケーションを維持し、かかる司令部は可能な限りの的確で迅速な助言と支援を行なう⁴²⁾。

次に、義勇軍組織の編成について、義勇軍兵士は小隊、分隊、中隊、大隊、連隊に配属され、それぞれの単位は以下のように組織されている。(イ) 小隊は、8名から編成され、そのうちの1名は伍長として行動すること。(ロ) 分隊は、2個の小隊から編成され、軍曹の指揮下に置かれること。(ハ) 中隊は、4個の小隊から編成され、大尉の指揮下に置く。なお、通常は、中隊はそれぞれ2個の小隊から編成される左翼隊と右翼隊を単位として行動し、それぞれの准中隊は中尉ないしは少尉の指揮の下におかれるものとする。中隊には、ラッパ手または鼓手を2名、工兵1名、軍旗護衛曹長1名、信号手4名を置くものとする。1個中隊は、中隊長1名、下士官2名、軍旗護衛曹長1名、軍曹4名、伍長8名、兵卒56名、ラッパ手または鼓手を2名、工兵1名、信号手4名の79名で構成する。(ニ) 大隊は、8個中隊で編成され、大佐の指揮下に置かれ、補佐官を置くものとすると記載されている⁴³⁾。

このように、アイルランド義勇軍は、理念的には、中隊を基礎にした自治的な連合体としての組織編成を取りつつも、実質的には、分派を許さない一枚岩的かつ集権的な組織原理のもとに組織された集団であったと考えられる。このことは義勇軍の存立基盤の脆弱性を反映したものであった。つまり、その背景として、結成当時、義勇軍兵士の中で武器の使用に手馴

れた者は1%に過ぎず、兵士の軍事教練が緊喫の課題であったことと、『資金調達のためのアピール』に見られるように、財政的に厳しい条件の下に置かれていたことを踏まえておく必要であろう⁴⁴⁾。

何よりも、ナショナリスト勢力の団結を確保するという課題は、義勇軍の呼称をめぐる議論の中でも重要な意味を持つことになる。ウェインホテルにおける準備会合段階では、国民的な義勇軍の編成を強く主張するマクニールの意向を受けて、義勇軍運動に国民的性格を持たせようとする試みが議論されており、名称をアイルランド国民義勇軍とする案が出されていた。しかし、ロタンダでの公式会合では、この国民的性格は後退し、ナショナルという呼称は削除されている。ここには、アルスターにおけるユニオニストの義勇軍運動に対する直接的な言及は避けられてはいたが、国民的性格を前面に立てないことにより、反ユニオニストおよび反プロテスタントの意味合いを運動に込めようとする意図が見られる。つまり、アルスターにおけるユニオニストの行動に明確に対峙する姿勢を取るか否かという問題を避けては、義勇軍運動を進めることができないという判断がホブソンおよび名称の変更を主張したピアース、バースリーらIRBメンバーのリパブリカンの間には存在した。分離独立の方針とするリパブリカンが指導権を握る準備会において、アルスター問題に関する意思表示をしないことはリパブリカンの団結を乱すものであり、譲ることのできない一線であった。したがって、アイルランド義勇軍は、形式的には民主主義とアイルランド人民の諸権利の保護を謳いつつも、アルスター義勇軍のカウンターパートとしての性格を本来的に持つものであった⁴⁵⁾。

かくて、アルスターをめぐる、ユニオニスト＝プロテスタントとナショナリスト＝カトリックの二つの勢力を明確に峻別され、対峙する構図がここに出来上がることになる。

こうしたホブソンとマクニールの義勇軍結成の動きに対して、1913年11月の段階では、レドモンドらの議会主義的ナショナリストからの表立った反発は見られない。だが、アイルランド議会党のゴールウェイ北選挙区選出のリチャード・ヘイズルトン下院議員は、マクニールの義勇軍運動を不適切な行為であるとして、慎重な対応を求める書簡をレドモンドに送っている。つまり、レドモンドをはじめとする主流派勢力は義勇軍運動のその後の動きを慎重に注視する姿勢を取っていたと言えよう⁴⁶⁾。

この組織は、1914年のイースター祭以降、レドモンドが議会主義派ナショナリストの義勇軍への接近を黙認する態度に出たことにより、アイルランド議会党支持者を中心に義勇軍への入隊者が飛躍的に拡大することになる。結成当初は約1,850人であった義勇兵は1914年9月には、約18万人を組織するまでに成長していったのである。この時点で、義勇軍内部の党派構成はレドモンド支持派がリパブリカン支持派を上回り、多数派を構成する状況が作られることになった⁴⁷⁾。

すなわち、アイルランド義勇軍の勢力拡大は、皮肉にも、議会主義的ナショナリストと分離

主義的ナショナリストの分派対立を組織内に持ち込む契機となったのである。

[4] 「アイルランド義勇軍」の危機

こうして結成されたアイルランド義勇軍であったが、その統一性は政治情勢の急激な変化の前に危機に立たされることになる。すでに述べた点であるが、マクニール自身、必ずしもアイルランド議会党を積極的に支持する姿勢をとっていなかった。むしろ懐疑的にその活動を見ていたと言ってよい。マクニールのアイルランド議会党に対する不信感は、二つの争点において、ナショナリストの分裂を引き起こす契機となる。

第1の争点は第3次アイルランド自治法案に「カウンティ・オプション」を盛り込んだ修正案を呑むかどうかという問題であり、第2の争点はアイルランド義勇軍の第一次世界大戦への参加の是非をめぐる問題であった。

第1の争点について見ると、1912年4月、第三次アイルランド自治法案が下院に提出された。これは、グラッドストーンが提出した第二次アイルランド自治法案と同じカナダ方式の自治権付与を内容とするものであり、連合王国のもとで権限移譲に基づいた自治を容認しようとするものであった⁴⁸⁾。ここで重要なのは、ウインストン・チャーチルが同年8月に、ロイド＝ジョージとレドモンドに送った書簡である。その内容は、いずれかのアイルランドの郡を5年ないしは10年の間、自治法から適用除外するというものであった。これはロイド＝ジョージによって、「カウンティ・オプション」として1914年に提案されたプランとはほぼ原型をなすものであった⁴⁹⁾。

こうした動きに照応して、1912年9月、UUCは『アルスターにおける神聖同盟と誓約』を発表する。この大衆的な運動の盛り上がりを背景に、UUCは12月、アイルランド自治法案からの全アルスターの除外を要求するとともに、翌年1月には、カーソンが同様の内容の修正案を英国下院に提出したのである⁵⁰⁾。

他方で、1913年1月に行われたデリー／ロンドンデリー市の補欠選挙で、アイルランド議会党が勝利したことにより、アルスター33選挙区のうち17選挙区を自治法案支持派議員で占めることになった。アルスター選出の下院議員の過半数が第三次アイルランド自治法案を支持するという情勢が生まれたのである。こうした中、アイルランド自治法案は、同月、下院を通過した。だがその後、上院は2度、これを否決し下院に差し戻したのである。しかし、この法案は、原案のままであったならば、議会法にしたがって、1914年7月には成立し、新しいアイルランド議会は1915年7月までにダブリンに設置される見通しであった。しかし、保守党党首ボナー・ローとカーソン卿のラインは、あくまでもアルスターないしはアルスターの一部は自治法案から除外されるべきであると抵抗し続けたのである⁵¹⁾。7月の上院による2度目の否決を受けて、10月、アスキス政権は国王の仲介で上院および保守党との合意形成のための調整に動

き、法案の修正に応じようとした。レドモンドは民族自決原則に基づいたアイルランド全体に対する処理案であれば、修正に応じる準備をしていた。こうした動きの中で、1914年2月、ロイド＝ジョージ蔵相は法案の中に、「カウンティ・オプション」County Option条項を盛りこむことを提案したのである⁵²⁾。

この提案は、アルスター諸郡いずれかについて、6年の間、自治法から適用除外し、その後の帰属を住民投票で決定できるとする内容であった。レドモンドは3年間の「カウンティ・オプション」であれば受け入れられるという立場を取っており、アイルランド議会党の下院議員からの同意を得ていた。しかし、カーソン卿は、英国下院に「カウンティ・オプション」が提起された時、この修正条項に対して、「6年間の執行猶予を与えられた死刑」⁵³⁾を宣告するものであると批判し、これを拒否していた。

これを受けて、ウインストン・チャーチルは、アルスターが、「カウンティ・オプション」を拒否するという事は、かれらが投票用紙より銃弾を選択することであると主張し、ユニオニストに対して妥協の選択を迫ったのである。これには、6年間の猶予期間の間に、少なくとも2回の総選挙が実施される可能性があったからである。保守党のボナー・ローは、この点を踏まえて、次期総選挙で保守党が政権に復帰したならば、一時的な除外ではなくそれを恒久的なものにすることができると考えていた。それゆえ、自由党政府と保守党の議論はアルスターのどの郡を自治法案から除外するのかという論点に絞られていくことになる⁵⁴⁾。

第2の争点について、レドモンドが1914年の第一次世界大戦の勃発を受けて、英国の対外政策に協力する方針を打ち出し、アイルランド義勇軍を英国軍とともに従軍させる決断をする。そして、レドモンドは、アルスター義勇軍を中心に構成される第36師団に対抗して、レドモンド支持派のアイルランド義勇軍兵士約18万4,000名を第10師団と第16師団に動員することになる⁵⁵⁾。これは1914年のホーム・ルール法の施行を保障し、アルスター問題をめぐる交渉を有利に進めよとする政治的意図が存在した。マクニールはアイルランド義勇軍の総司令官として、英国政府がこの運動を抑圧しようものなら、その場合にのみ武力的抵抗は正当化されるという条件を示した上で、レドモンドの提起を受けて、第一次世界大戦への参加を承諾する⁵⁶⁾。

このことは、「イングランドの危機は、アイルランドの好機」という観点に立つリパブリカンの反発を引き起こし、ナショナリスト勢力を分裂に導く重要な契機となったのである⁵⁷⁾。

そして、アイルランド議会党がその政治的影響力を後退させていくのとは対比的に、武力闘争も視野に入れた強硬路線をとるシン・フェイン党は党勢の拡大を進めることになる。ナショナリスト勢力の分裂とシン・フェイン党の台頭という展開について言うと、リパブリカンによる1916年のイースター蜂起の影響が重要である。イースター蜂起についての評価については別稿に譲るとして、このイースター蜂起の後、ユニオニストとナショナリストとの間の仲裁に入ったロイド＝ジョージは、レドモンドとの間で、アルスターを除くアイルランドに対して、自

治法の即時実施を条件に、戦時中はファーマナーとティーロンをアルスターに残し、戦後の議会においてそれらの処遇を検討するという合意を取りつけていた。しかし、この合意は、1917年7月から1918年4月に行われたアイルランド会談での交渉が不調に終わったこととあいまって、戦時体制下において、具体化されるに至らなかった。こうした情勢の中で、レドモンドのアイルランド議会党は第一次世界大戦への参戦支持を表明し、アイルランド義勇軍の動員を進めたのである。つまり、レドモンドの党は、ファーマナーとティーロンを犠牲にすることを提案したにもかかわらず、自治を勝ち取ることができなかったのである。このことは、ナショナリスト勢力の分裂を決定的なものにした⁵⁸⁾。

かくて、1918年、アイルランド自治をめぐる交渉が不調に終わると、マクニールは、レドモンド派が多数派を占めるアイルランド義勇軍から分離して、新たな義勇軍組織を編成することになる。そしてこの組織は、シン・フェイン党の指導のもと、アイルランド共和軍 (IRA) に継承されていくことになる。

まとめ

以上、オウン・マクニールとバルマー・ホブソンの行動を軸に、1911年から1913年におけるアイルランド義勇軍形成期の政治過程とその背景、およびその性格と組織形態について検討した。文化的ナショナリズム運動から政治的ナショナリズム運動への移行期において、オウン・マクニールの存在はこの二つの運動を結びつける象徴的な意味を持つものであったとすることができる。だが同時に、水面下でマクニールの活動を補完し、ナショナリストの要求を政治的かつ組織的な運動に発展させるポジションに存在したのがバルマー・ホブソンであったという点を見ておく必要がある。ここで少なくとも言えることは、第1に、この時期、アルスター危機の背景に見られる英国政府およびアルスター・ユニオニストの巻き返しを前にして、政治権力に対抗する手段を持たない文化的ナショナリズム運動の限界が明らかになったことと、ゲーリック・リーグの運動をベースに、政治的ナショナリズム運動への転換を余儀なくされたということである。第2に、アルスター・ユニオニストの義勇軍運動を契機に、アイルランド義勇軍が結成されたことは、アルスターをめぐる、ユニオニスト＝プロテスタントとナショナリスト＝カトリックの2つの勢力の対峙する構図が明確に出来上がったことである。つまり、このアルスター危機を画期として、現在の北アイルランド問題の基本的な対抗軸が構築されたと考えられるのである。第3に、アイルランド義勇軍の形成・展開・分裂の過程を通して、アイルランドにおけるナショナリズム運動が、連合王国の枠内での自治獲得要求を中心とした運動から分離主義的要求を軸とした運動に明確にシフトし、これが主導権を握る状況が生まれてきたことである。残された課題として、アイルランド義勇軍の全体像を解明するためには、

1914年以後の政治情勢の変化を踏まえつつ、1916年のイースター蜂起との関係、シン・フェイン党との関係について再検討する必要があると考える。

注

- 1) 拙稿「19世紀アイルランドにおけるナショナリズムと知識人（2・完）」（『立命館国際研究』第21巻第2号，2008年）を参照。
- 2) トーマス・クラークは1916年の共和国宣言の起草者の一人である。アメリカ合衆国に移住後、クラン・ナ・ゲールのメンバーとなり、1883年の爆弾攻撃運動の参加し、逮捕され終身刑を受けている。1898年に保釈され、アメリカに戻っていたが、1907年にアイルランドの帰還後、IRBの軍事評議会の創設者の一人として、アイルランド義勇軍とかかわり、1916年のイースター蜂起計画に関与した。
- 3) Francis Xavier Martin, "MacNeill and the Foundation of the Irish Volunteers," in Francis Xavier Martin and F. J. Byrne (eds.), *The Scholar Revolutionary : Eoin MacNeill, 1867-1945, and the Making of the New Ireland*, Shannon, pp.111-112.
- 4) *The Times*, 11 October 1911.
- 5) Jeremy Smith, *The Tories and Ireland 1910-1914: Conservative Party Politics and the Home Rule Crisis*, Dublin, 2000, pp.78-79.
- 6) Eoin MacNeill, Memoir, p.74, in Francis Xavier Martin (ed.), *The Irish Volunteers, 1913-1915: Recollections and Documents*, Dublin, 1963. オウン・マクニールの回顧録である“Memoir”は、1932年から1940年の期間に口述筆記されたものであり、マクニールの長女であるアイリーン・ティアニーの所有である。ここでは、1963年にF・X・マーチン編集の*The Irish Volunteers, 1913-1915*に資料として所収されたものを利用した。
- 7) Alan O'Day, *Irish Home Rule 1867-1921*, Manchester, 1998, p.258.
- 8) Ulster Day, Saturday, 28th, 1912. "Ulster's Solemn League and Covenant," in Arthir Mitchell and Pdraig O Snodaigh (eds.), *Irish Political Documents 1869-1916*, Dublin, 1989, p.136.
- 9) Denis Gwynn, *The Life of John Redmond*, London, 1932, p.232.
- 10) Francis Xavier Martin, "MacNeill and the Foundation of the Irish Volunteers," p.112.
- 11) *Irish Freedom*, April 1912, p.2.
- 12) *Ibid.*, p.7.
- 13) Marcus Bourke, *The O'Rahilly*, Tralee (Co. Kerry, Ireland), 1967, p.69.
- 14) Eoin MacNeill, Memoir, p.74.
- 15) Francis Xavier Martin, "MacNeill and the Foundation of the Irish Volunteers," pp.115-116.
- 16) *Ibid.*, p.116.
- 17) *Ibid.*, pp.118-119.
- 18) F. S. L. Lyons, *Ireland since the Famine*, London, 1985, pp.282-283.
- 19) R. M. Fox, *The History of the Irish Citizen Army*, Dublin, 1944, p.2.
- 20) *Ibid.*, p.47. 1913年11月13日のベレスフォード・パレス集会で4師団からなる市民軍結成の必要性が提起され、11月18日のカスタム・ハウス集会において入隊者の募集が行われた。
- 21) Francis Xavier Martin, "MacNeill and the Foundation of the Irish Volunteers," pp.124-125.
- 22) オレイリは「ミッドランド義勇軍が新聞記事以外に現実に存在しているかどうかは、大いに議論の余

地があり、疑わしいものだと思われる。だが、アイルランド義勇軍の組織者は、ウェインホテル集会以後、アスローンないしはミッドランド地域に何らかの義勇軍の存在を見出すことができなかったことは確かである」と回顧している。

23) *Police Record for Ireland*, CO904/14, Part 1 (October, 1913).

24) Michael Tierney, *op.cit.*, p.103. ジャルムド・リンチは、義勇軍の結成に直接導いたとされるマクニールの歴史的な論文は、オレイリによって促されたものと主張している。当時、マクニールは病床にあり、そこにオレイリが機関誌の最新号に寄稿してもらうためにマクニールを訪問した際、上記の論文の骨子を指示したとしている。

他方、マーカス・バークは、マクニールの「The North Began」文書について、「アイルランド義勇軍の結成に直接導いたとされるマクニールの歴史的な論文は、オレイリによって促されたものであることに疑いの余地はない。当時、マクニールは病床にあり、そこにオレイリが機関誌の最新号に寄稿してもらうためにマクニール邸を訪問した。その際、上記の論文の骨子を指示したのでないか」と推論を立てている。その真偽は定かではないが、少なくとも言えることは、ザ・オレイリが親交のあるマクニールに当時の政治的情報や機関紙の編集長として執筆の機会を提供したことは事実である。Marcus Bourke, *The O'Rahilly*, Tralee (Co. Kerry, Ireland), 1967, p.17.

25) Francis Xavier Martin, "MacNeill and the Foundation of the Irish Volunteers," pp.161-163. なお、幹部会メンバーとして指名された12人のうち、モーランは辞退し、J.A.ディーキン、J.キャンベル、W.P.ライアンは11日の第1回会合には出席した後で脱落している。11日と14日の準備会に出席した主なメンバーは、バルマー・ホブスン、オウン・マクニール、パトリック・ピアース、ショーン・マクダーモット、イーモン・セアント、ザ・オレイリ、ジョセフ・キャンベル、ジェイムス・ディーキン、ショーン・フィッツボーン、ピアラス・ベアスレイ、シーマス・オコンナー、ロバート・ベイジ、コルム・オローリン、イーモン・マーチン、ウイリアム・P・ライアン、マイケル・J・ジャッジ、モーリス・ムーアなどである。Bulmer Hobson, *A Short History of the Irish Volunteers*, Dublin, 1918, pp.17-18. *An Poblacht / Republican News*, 26 November 1998.を参照。

26) D. George Boyce, *Nationalism in Ireland*, London, 1982, pp.282-283.ロジャー・ケイメントは、「あなたがダブリンの労働者を鍛え軍紀のもとの組織する運動を始めたと考えています。これは健全かつ当然の運動です。私をこの運動を支持したい。アイルランド人のたくましさを示し、ナショナルな大目的がまったく持って正しいことを証明するために、広範な全国的な運動になること期待しています」とする書簡をマクニールに送っている。

27) National Library of Ireland, "Eoin MacNeill and the Irish Volunteers", in *The 1916 Rising: Personalities and perspectives*, p.10. [<http://www.nli.ie/1916/pdf/3.1.5.pdf> (検索日2008年9月5日)], Francis Xavier Martin (ed.), *The Irish Volunteers, 1913-1915: Recollections and Documents*, pp.30-31. Bulmer Hobson, *A Short History of the Irish Volunteers*, p.19.

28) Francis Xavier Martin, "MacNeill and the Foundation of the Irish Volunteers," pp.115-116. ショーン・マクダーモットは、デニス・マッカローの推薦でIRBに入党している。

29) Eoin MacNeill, *Memoirs*, p.74. 1913年12月13日付のジョン・ホーガンに宛てた書簡には、「私は、公然たる政治家ではない。あなたには、私がまったく以って、政治の指導者になろうという意思も野心もないことを関係するすべての人々に明らかにしてほしい」とある。(John J.Horgan, *Parnell to Pearse ; some recollections and reflections*, Dublin, 1948, pp.228-229.)

30) *Ibid.*, p.107.

- 31) Bulmer Hobson, *Ireland—yesterday and tomorrow*, Tralee (Co. Kerry, Ireland) 1968, p.43.
- 32) Francis Xavier Martin, "MacNeill and the Foundation of the Irish Volunteers," p.138.
- 33) Desmond Ryan (ed.), *Collected Works of Padraic H. Pearse: Political Writings and Speeches*, Dublin, 1922, pp.141-142.リンチによると、かかるピアースの発言から1913年の夏ないしは秋には、ピアースはナショナリストと接触を持っていたと考えられる。その時点で、かれが接触していたナショナリスト・グループはアイルランド義勇軍の結成を決めていたとされている。しかし、ピアースは1913年11月まで、IRBのメンバーではなかったと言われており、12月のIRBの総会にはじめて現れたことが記録されている。これ以前については定かでない。Michael Tierney, *Scholar and Man of Action*, Clarendon Press, Oxford, 1980, p.102. Diarmuid Lynch, *The IRB and the 1916 Rising*, Cork, 1957, p.23.
- 34) Brian Farrell, *op.cit.*, p.190.
- 35) *Freeman's Journal*, 17 November 1913, p.4.
- 36) Bulmer Hobson, *A Short History of the Irish Volunteers*, pp.25-26.
- 37) *Ibid.*, pp.29-30.
- 38) *Ibid.*, pp.31-32.
- 39) *Ibid.*, pp.29-33.
- 40) *Ibid.*, pp.29-30.
- 41) *Ibid.*, p.40.
- 42) *Ibid.*, pp.36-38.
- 43) *Ibid.*, pp.29-30.
- 44) *Ibid.*, pp.36-38, 41-42.
- 45) *Ibid.*, pp.17-18.
- 46) *Ibid.*, pp.43-45.
- 47) Francis Xavier Martin, "MacNeill and the Foundation of the Irish Volunteers," pp.178-179.
- 48) Denis Gwynn, *The History of Partition 1912-1925*, Dublin, 1950, p.238.
- 49) *Ibid.*, pp.251-253.
- 50) A.T.Q Stewart, *The Ulster Crisis: Resistance to Home Rule 1912-1914*, London, 1967, p.66.
- 51) *Hansard (Commons)*, Vol. 58, [11 February 1914], cols.157-156.
- 52) *Hansard (Commons)*, Vol. 59, [9 March 1914], cols.906-908. Michael Laffan, *The Partition of Ireland 1911-1925*, Dundalk (Ireland), 1983, pp.35-38.
- 53) *Ibid.*, cols. 933-934.
- 54) *Ibid.*, cols. 906, 913-916, 934-936.
- 55) Leon O'Broin, *Revolutionary Underground: the Story of the Irish Revolutionary Brotherhood, 1858-1924*, Dublin, 1976, p.115.レドモンド支持派は「国民義勇軍」と名乗っていた。第一次世界大戦に従軍した兵士の大部分が十分な訓練を受けた者ではなかったと言われている。他方、この段階で、マクニールを中心とする勢力は約1万1,000名と言われており、かれらは「アイルランド義勇軍」を名乗っていた。
- 56) Michael Tierney, *op.cit.*, pp.150-155.
- 57) Jeremy Smith, *op.cit.*, pp.156-157. Edmund Curtis and R. B. McDowell (eds.), *Irish Historical Documents 1172-1922*, London, 1943, pp.292-297. そもそも、ナショナリストとユニオニストとの間

にある相違は、以下のような点において問題となった。つまり、この同盟が英国における汎ケルト運動を組織する諸団体と連帯できるかという点であった。1914年には、チャーチ・オブ・アイルランドのジェイムズ・ハンナイがジョージ・バーミンガムというペンネームで書いた書物の中で、アイルランド人の生活を冒涇するような内容が含まれていたとしてゲーリック・リーグを除名になる事件が起こっている。その背景には、IRBがかかるリーグの指導部を完全に掌握しつつあったという点が重要である。そして、IRBの指導の下で、1915年には、ゲーリック・リーグの代表であるダグラス・ハイドを解任させるなど、指導部構成の大幅な変更が行われたのである。

58) John McGarry and Brendan O'Leary, *op.cit.*, p.95.

(南野 泰義, 立命館大学国際関係学部教授)

Rethinking on “the Irish Volunteers” —1911-1913—

The purpose of this paper is to rethink activities, organisation and background of the Irish Volunteers (1913) as a movement of Irish political nationalism. Many scholars have tended to concentrate on the Easter Rising (1916) directed by Irish republicans rather than the Irish Volunteers on the research of Irish nationalism movement in the early 20th century. But, in this case, it is important to study preconditions on the eve of the Easter Rising. In the 1910s, some impotent occasions, which were the armed movement (Ulster Volunteers Force) in Ulster directed by the Unionist / Conservative party and a change of Government in England with the declared object of deciding what all parties admit to be vital political issues (Home Rule Bill) concerning Ireland, caused re-politicizing and re-organizing of Irish nationalist movement.

In this paper, Eoin MacNeill and Bulmer Hobson were be focused as important figures of Irish cultural nationalists (1893-1915). Because Eoin MacNeill who had been the architect, philosopher and organizer of Gaelic League was driven himself into political action as the founder of the Irish Volunteers in 1913, despite his emphasis on the voluntaristic nature of nationalities and his hatred of the standardization resulting from mass politics. And Bulmer Hobson was a substantial leader of Irish Republican Brotherhood (I.R.B) and organized substantially the Irish Volunteers, who was pulling the wires from behind.

(MINAMINO, Yasuyoshi, Professor, College of International Relations, Ritsumeikan University)

